歌・句集

屑籠

森

歌・句集

屑籠

歌・句集

屑籠

昭和六十年九月十五日発行

発行者　森　郁

埼玉県桶川市東二丁目三番九号

電話（〇四八七）七一―一五二〇

印刷所　（株）誠美堂印刷所

自　序

自選歌・句集発刊にあたり

表題「屑籠」の謂われは、紙屑を入れておくかご、であって、物好きが柄にもなく作った歌・句が溜ったのでこれを捨ててしまうのも惜しく、且つ、残生も先が見えて来たように思い、この辺を節目に、活字化して置こうかという気になった。後のちの者に、こんな風流なと言えば奇麗ごとで、物好きの爺さんが居たのかと思い起してもらいたい願いもある。

もとよりこうした趣味が心のどこかにあったのかもしれない。それは、父（落合次郎・文久三年二月七日生れ）が俳句の宗匠で、一羽と号していたからであろ

うか。

永い辛らい五十年間の宮仕えをやめたのを契機に、親父の真似ごとでもしてみようかと思い齢い七十を過ぎ、しかも自己流で手習いを始めたのである。従ってずぶの素人であり猶日も浅く定型詩のなかに幽玄にして詩情ゆたかな歌・句の詠める筈がない。ほんの真似ごとにすぎない。でも、時には心臓強く新聞へ投稿し入選作品のできた時は、一人悦に入っていたのである。

一ヶ月ばかりかけ「屑籠」を整理してみてまあこんなところかと思ったが、さて、これを刊行することになると、聊かためらいと同時に内心少なからず忸怩たるものがあった。

短歌には若干、俳句は概ね、川柳は僅かの新聞投稿による入選作品がある。人は、歌・句歴何十年などと聞くが、天性もなく、況や素人が尊大にも歌・句集を発刊するなんて笑止千万と言えばそれまでのこと、でもいい、曲がりなりに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

も形のできたことはこの上もなく嬉しく仕合わせに思うのである。と共にこれが吾が人生唯一の贈り物となることであろう。

ご笑覧いただければ、望外の幸いと存ずる次第である。

昭和六十年五月

森　郁

目次

短歌の部

詠進歌……1
自叙抄……4
両親追慕……10
追憶……引揚げ其の一……16
羽脱鳥……引揚げ其の二……20
妻逝く……24

お月さま……29
折ふし……32
国内旅情抄……四十七都道府県……43
国外旅情抄……国別……88

俳句の部

四季……102

川柳の部

雑詠……108

短歌の部

詠進歌

お題　桜　　昭和五十六年

保育所の桜散り初めもみじ掌に花びら掬ぶ嬉々としてあり

お題　音　　昭和五十七年

岩清水落ちいる音は幽境に妙なる調べ奏(かなで)て止まず

お題　橋　　昭和五十八年

山水の落ち合いなが流れゆき潮入りまでに幾橋くぐる

お題　緑　　昭和五十九年

風雪を堪え忍びてし松ヶ枝の光を添えて幽雅な緑

お題　旅　　昭和六十年

石敷ける旧街道を箱根山交う人もなき旅の一日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

自叙抄

素百姓末子八男大家族　「おしん」　子守りの背
も温く

夜ごと聴く母の童話に眠りけり身に泌みあり
て想いで尽きず

黄ばみたる成績表は学業の一等賞はこころの誇り

学力の優秀生と郡長の表彰を受け父母に酬いぬ

田畑また山の作業を見習いて晴耕雨読は若き日にあり

青年の模範なりとて誌上載る表彰されしは十九の春か

徴兵に甲種合格籤(くじ)二番奉公なせり御国のために

若き日の血潮はたぎり海渡る夢見ることの大きにありて

井の蛙世情うときに夢も消え小吏となりて活路を得たり

ふる里は異郷に在りてこそ恋し星月仰ぎ十余年過ぐ

敗戦の嵐の中のはぐれ鳥帰国を夢に幾夜目覚めし

死線越え妻子伴ない帰郷せど世の移ろいに空
蟬の鳴く

現せ身の苦渋なめしも職に就く指揮刀を帯び
金線光る

公僕の道一筋にいそしめり停年となる淋しき
日まで

前職の資格は社会に役立ちて自動車学校長十五年なす

宮仕え仕事一途の五十年悔いのなければ余生明るし

叙勲には妻を伴い拝謁の栄に浴せり凰鳳の間へ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.